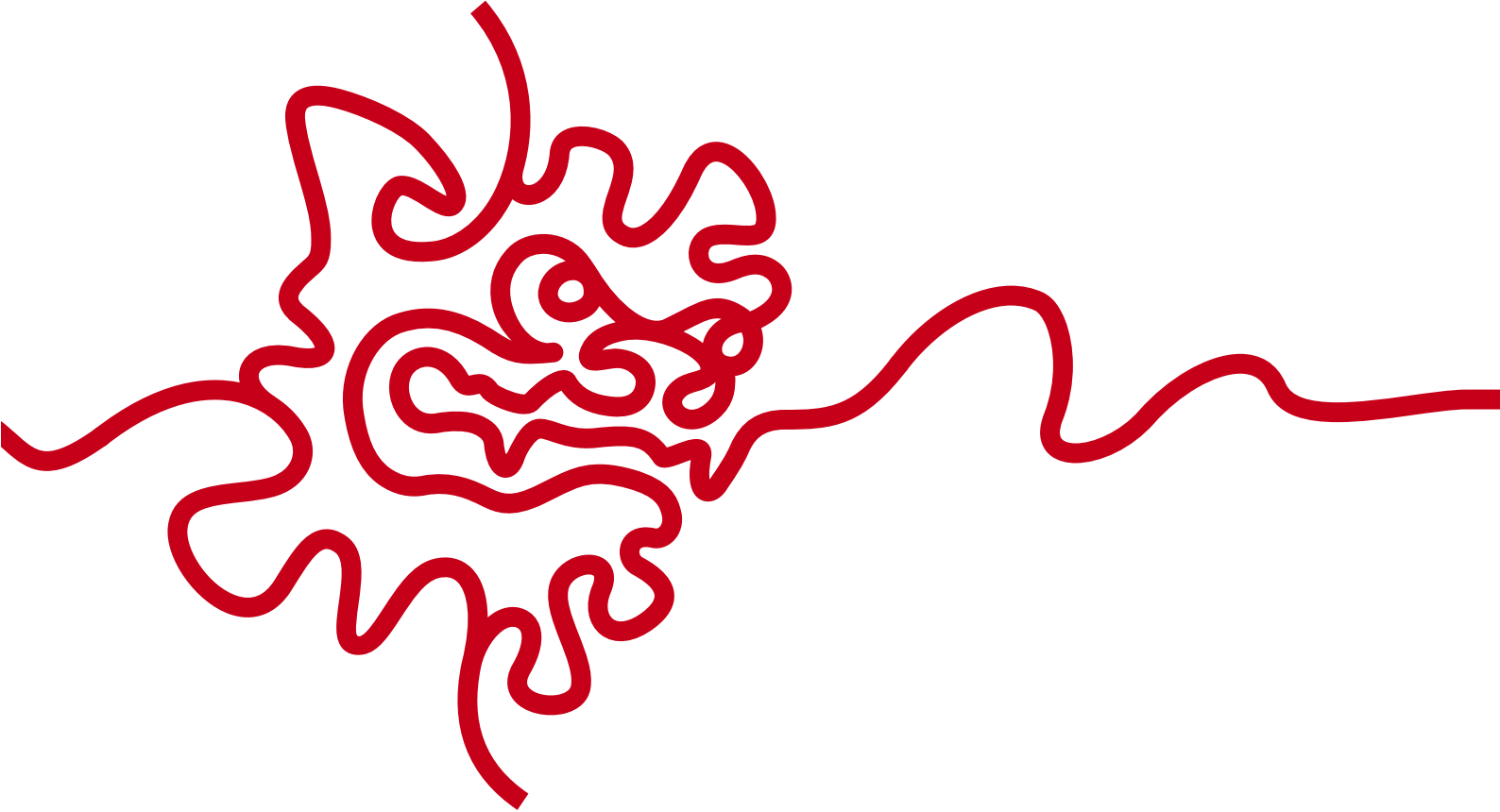




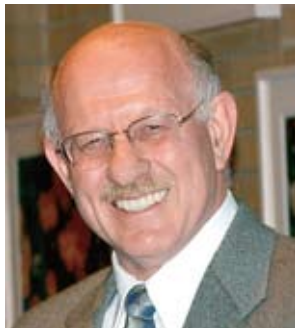
OIST

OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY
沖縄科学技術大学院大学





■ ご挨拶



沖縄科学技術大学院大学（OIST）は、科学技術に関する卓越した教育研究を行うことにより、沖縄の自立的発展と日本及び世界の科学技術の向上に寄与することを目指しています。

OISTには、生命科学、物理科学、環境科学といった分野から既に50名近くの世界トップクラスの教員が着任し、ここ沖縄で研究を開始しています。OISTは教員と学生の半数以上を外国人とし、教育と研究は全て英語で行う予定です。また、OISTは、単一の研究科・専攻のみを設け、創造力が培われる研究環境の下、設備・機器の共用を促進することにより、真に学際的な研究が行われる大学を目指します。2012年9月以降、世界中から選りすぐられた最優秀の学生が毎年20名ずつ、ここ沖縄にやってきます。OISTの博士課程プログラムでは、それぞれの学生が、基本となる学問分野の基礎をしっかりと身に付けるとともに、学際的な研究につながる形で、個々の専門分野の知識を深めることができるようにデザインされています。

OISTの設立目的の一つが沖縄の振興と自立的発展に貢献することです。OISTの創造性に溢れる頭脳と先端的な研究基盤を組み合わせることで、様々な発見につながり、沖縄における技術革新の原動力にもなりえるでしょう。

日本政府は素晴らしいビジョンを掲げ、OIST設立のために支援を継続してきました。私は、OISTが世界の科学と教育の常識を覆すリーダー的存在となると確信しています。

A handwritten signature in black ink that reads "Jonathan Doonan". The signature is written in a cursive, flowing style.

沖縄科学技術大学院大学学長
ジョナサン・ドーファン

■ 沖縄科学技術大学院大学について

2001年6月、沖縄科学技術大学院大学構想が当時の内閣府特命担当大臣(沖縄・北方対策、科学技術政策担当)によって提唱された。

設立目的

世界最高水準の科学技術に関する研究及び教育を実施することにより、沖縄の自立的発展と、世界の科学技術の向上に寄与することを目的とする。



基本コンセプト

目的は以下の理念に基づくものである。

世界最高水準	世界トップクラスの英知を結集し、世界最高水準の科学技術に関する研究及び教育を行う。
柔軟性	政府の規制に沿った柔軟な組織運営を行うほか、政府の資金提供のもと、自主性と運営の柔軟性を保持し、世界トップクラスの大学院大学を目指す。
国際性	教員と学生の半数以上を外国人とし、公用語は英語とする。
世界的連携	世界の、とりわけアジア・太平洋地域における科学者のネットワークの中心地として発展しながら、世界のトップクラスの大学や研究機関と連携して研究協力や共同研究を行う。
産学連携	企業との共同研究や研究成果の産業化に取り組むと同時に、企業を誘致することで、知的・産業クラスターを形成する。

沖縄科学技術大学院大学学園法について

この構想を具体的に実現するために、沖縄科学技術大学院大学学園法案が2009年3月に国会に提出され、衆議院・参議院ともに全会一致で可決・成立し、7月10日に公布されました。同法は、大学院大学の設置形態として、自主性と運営の柔軟性を尊重する観点から特別な学校法人により設置される大学としています。2011年11月1日に同法が施行されました。

沖縄科学技術大学院大学の概要

- 学際的な1つの研究科(科学技術研究科)、1つの専攻(科学技術専攻)
- 5年一貫制の博士課程のみ
- 50名規模の教授陣で毎年約20名の学生を受け入れる
- 教育研究は英語で行う
- 学生、教員の半数以上は外国人となることを想定

研究活動



大学院大学の教育研究活動は、生命科学、物質科学、数学を含む学際的で先端的なものとする。将来の大学院大学の研究基盤を構築するため、これまでに神経科学、分子科学、数学・計算科学、環境・生態学、物理学の五分野に大別される、44の研究ユニットが発足した。2011年11月1日現在、研究員の数は200にのぼり（内、外国人およそ80名）、事務スタッフはおよそ100名に達している。

沿革

2001

6月 尾身幸次内閣府特命担当大臣(沖縄・北方対策、科学技術政策担当)(当時)が沖縄科学技術大学院大学構想を提唱

8月 第1回構想検討会(座長:有馬朗人元東京大学総長)開催(計8回開催)

2002

4月 第1回国際顧問会議をロサンゼルスにて開催(海外からは9名の著名な研究者が参加。うち3名はノーベル賞受賞者)(計3回開催)

5月 沖縄復帰30周年記念式典において、小泉純一郎内閣総理大臣(当時)が沖縄科学技術大学院大学の推進を表明

7月 沖縄振興計画において、本構想を沖縄の振興施策の大きな柱として位置づけ

2003

1月 第156回国会施政方針演説において、小泉純一郎内閣総理大臣(当時)が本構想の推進を改めて表明

4月 恩納村を大学院大学の建設予定地として選定

7月 国際顧問会議の決定に基づき、評議会(議長:ジェローム・フリードマンMIT教授)を東京において開催

10月 本構想の先行事業として、国際シンポジウムを万国津梁館において開催

2004

2月 本構想の先行事業となる研究事業 Initial Research Project (IRP) として、4件のプロジェクトを選定

3月 本構想の先行事業として、第1回国際ワークショップを開催

7月 第1回ボード・オブ・ガバナース(BOG)会合を東京にて開催

12月 関係閣僚による申し合わせが行われ、2005年9月に本構想の主体となる研究機関の設立に合意

2005

3月 沖縄科学技術大学院大学構想の推進主体を設立する独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構法が国会にて可決

8月 シドニー・ブレナー博士を沖縄科学技術研究基盤整備機構初代理事長として指名

9月 独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構 Okinawa Institute of Science and Technology Promotion Corporation (OIST P.C.) 発足

2006

1月 OIST P.C. 設立後、第1回BOG会合をサンフランシスコにて開催

4月 恩納村における最初の施設として完成したOIST Seaside House へ本部移転

5月 第2回BOG会合を東京にて開催

12月 第3回BOG会合を東京にて開催

2007

3月 キャンパス造成工事着手

4月 沖縄科学技術大学院大学(仮称)メインキャンパス施設整備事業起工式典

7月 第4回BOG会合を万国津梁館において開催

9月 OIST P.C. 発足2周年記念式典を恩納村のホテルにて開催

1月 第5回BOG会合を東京にて開催

3月 研究棟とセンター棟の建設に着手

6月 G8科学技術大臣会合「環境とエネルギー問題」ワークショップを沖縄にて開催

7月 第6回BOG会合をOIST Seaside Houseと東京にて開催。沖縄科学技術大学院大学の「青写真」を決定

11月 シーサイドファカルティ宿舍の完成

オープンハウス(一般公開)2008を沖縄工業技術センターにおいて開催

2008

2月 第7回BOG会合を東京にて開催

3月 沖縄科学技術大学院大学学園法案国会提出

6月11日 同法案衆議院本会議にて可決(全会一致)

7月 3日 同法案参議院本会議にて可決(全会一致)

2009

7月10日 沖縄科学技術大学院大学学園法公布

10月 第8回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園設立委員第1回会合を東京にて開催

11月 オープンハウス(一般公開)2009を沖縄工業技術センターにおいて開催





2010

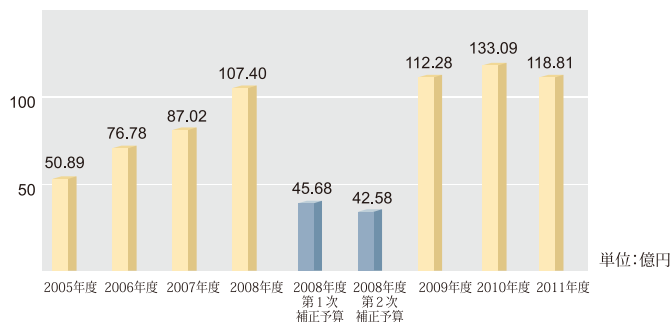
- 3月 キャンパス一部施設供用開始
第9回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園
設立委員第2回会合を沖縄にて開催
- 7月 第10回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園
設立委員第3回会合を東京にて開催
- 8月 恩納村 / OISTこどもかがく教室を谷茶公民館で開催
- 10月 第11回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園
設立委員第4回会合を沖縄にて開催
- 11月 研究棟2と講堂の建設に着手
オープンキャンパス(一般公開)2010をOISTキャンパ
ス(恩納村)にて開催

2011

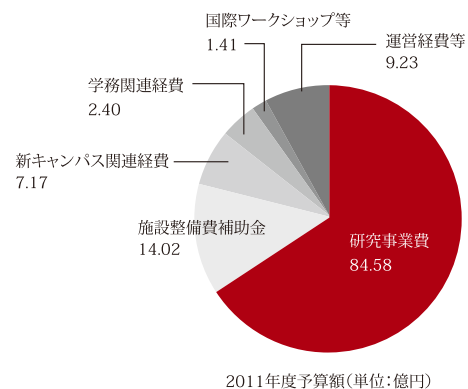
- 2月 第12回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園
設立委員第5回会合を沖縄にて開催
- 3月 文部科学大臣に対し学校法人寄附行為認可申請
文部科学大臣に対し大学設置認可申請
- 6月 第13回BOG会合及び沖縄科学技術大学院大学学園
設立委員第6回会合を沖縄にて開催
- 11月 沖縄科学技術大学院大学学園設立

予 算

内閣府からの予算交付は二つに分けられる。一つは、研究事業の充実のための運営費交付金で、もう一つはキャンパス整備に必要な施設整備費補助金である。2005年9月の発足以来、内閣府からの予算交付は毎年着実に増加しており、センター棟と研究棟1、研究棟2、そして研究棟3と、大学院大学開学時目標の主任研究者50人規模に必要な施設が段階的に完成する予定である。



※2005年度予算は、内閣府予算(2005年4~8月)と当機構予算(2005年9月~2006年3月)の2つからなる



2011年度予算額(単位:億円)

教員



行動の脳機構ユニット
ゴードン・アーバスノット 博士



生物多様性・
複雑性研究ユニット
エヴァン・エコノモ 博士



ゲノム・遺伝子制御システム
科学ユニット
ニコラス・ラスカム 博士



構造物性相関研究ユニット
マヘッシュ・バンディ 博士



生物システムユニット
イゴール・ゴリヤニン博士



統合システム
バイオロジーユニット
タティアナ・マーケスラゴ 博士



分子遺伝学ユニット
シドニー・ブレナー 博士



数理理論物理学ユニット
氷上 忍 博士



情報処理生物学ユニット
丸山 一郎 博士



量子システム研究ユニット
トーマス・ブッシュ 博士



神経システム行動ユニット
磯田 昌岐 博士



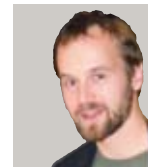
神経発生ユニット
政井 一郎 博士



流体力学ユニット
ピナキ・チャカラボティ 博士



微生物二次代謝産物
研究ユニット
ホルガー・イエンケコダマ 博士



生態・進化学ユニット
アレキサンダー・ミケエフ 博士



フェムト秒分光法ユニット
ケシャヴ・ダニ 博士



オープンバイオロジーユニット
北野 宏明 博士



物理生物学ユニット
ジョナサン・ミラー 博士



計算脳科学ユニット
エリック・デ・シュッター 博士



量子ダイナミクスユニット
デニス・コンスタンチノフ 博士



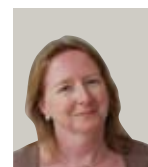
海洋生態物理学ユニット
御手洗 哲司 博士



神経計算ユニット
銅谷 賢治 博士



光学ニューロイメージングユニット
ベアン・クン 博士



光・物質相関ユニット
シーレ・ニコーマック 博士



発生分化シグナル
研究ユニット
メリー・アン・プライス 博士



構造細胞生物学ユニット
ウルフ・スコグラント 博士



生体分子電子顕微鏡
解析ユニット
マティアス・ウォルフ 博士



エネルギー材料と
表面科学ユニット
ヤビン・チー 博士



ナノ粒子医工学応用技術
研究ユニット
ムックレス・イブラヒム・ソーワン 博士



細胞シグナルユニット
山本 雅 博士



細胞膜通過輸送研究ユニット
ファデル・サマテ 博士



細胞分子シナプス機能ユニット
高橋 智幸 博士



GO細胞ユニット
柳田 充弘 博士



マリンゲノミクスユニット
佐藤 矩行 博士



生体制御分子創製化学ユニット
田中 富士枝 博士



臨界期の神経メカニズム
研究ユニット
杉山(矢崎) 陽子 博士



植物エピジェネティクス
ユニット
佐瀬 英俊 博士



電子顕微鏡ユニット
外村 彰 博士

2011年11月1日現在



量子理論ユニット
ニック・シャノン 博士



発達神経生物学ユニット
ゲイル・トリップ 博士



量子波光学顕微鏡ユニット
新竹 積 博士



神経結合の形成と
制御研究ユニット
デイヴィッド・ヴァンヴァクター 博士



数理生物学ユニット
ロバート・シンクレア 博士



神経生物学研究ユニット
ジェフ・ウィッケンス 博士



■ 人材育成・教育活動



沖縄科学技術大学院大学では、2012年9月の大学院大学開学に向けて国際ワークショップやサマーコースを開催している。これらは国内外の研究機関や大学などの連携を強化するとともに、大学院大学構想を国内外の科学者に広く伝え、将来大学院大学に参画する可能性のある若手研究者の育成を図ることを目的としている。

沖縄計算神経科学コース (OCNC)

計算神経科学は、脳や神経の働きをコンピュータによるシミュレーションなどによって解析する研究分野である。本コースは脳科学と情報科学の融合領域の集中コースで、2004年から毎年開催されている。気鋭の講師陣による講義には、国内外から応募した若手研究者や大学院生が参加。近年では学生達による実習プロジェクトも行われ、沖縄の素晴らしい自然環境の中、そして真に国際的な雰囲気の中、最新の研究を学ぶ機会となっている。

開催時期	サマーコース	参加者
2004年 11月 9日-11月19日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2004	74名
2005年 7月 1日- 7月10日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2005	61名
2006年 6月26日- 7月 7日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2006	65名
2007年 6月26日- 7月11日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2007	58名
2008年 6月16日- 7月 3日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2008	57名
2009年 6月15日- 7月 2日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2009	55名
2010年 6月14日- 7月 1日	沖縄計算神経科学コース(OCNC) 2010	53名
2011年 6月13日- 6月30日	沖縄計算神経科学コース(OCNC)2011	79名

国際シンポジウム・ワークショップ

開催時期	シンポジウム・ワークショップ名	参加者
2006年	3月 国際ワークショップ 第1回「分裂と停止の細胞制御」	55名
	4月 国際ワークショップ 「一分子解析」	46名
	5月 国際ワークショップ 「これからの霊長類の研究」	34名
2007年	2月 国際ワークショップ 「OIST-韓国ワークショップ」	35名
	2月 国際ワークショップ 「出芽酵母シグナル伝達系のシステムバイオロジー」	21名
	3月 国際ワークショップ 「認知神経生物学」	47名
	3月 国際ワークショップ 「第2回分裂と停止の細胞制御」	72名
	3月 国際ワークショップ 「電子顕微鏡の将来」	23名
	4月 国際ワークショップ 「逆問題」	31名
	11月 国際シンポジウム 「OIST-Salk 神経科学会合」	38名
	12月 国際ワークショップ 「高性能コンピューティング」	29名
2008年	1月 国際ワークショップ 「OIST-HFSP神経基質」	29名
	1月 国際ワークショップ 「スーパーハッカソン」	31名
	3月 国際ワークショップ 「MAPK経路のシステムバイオロジー」	35名
	4月 国際ワークショップ 「第3回分裂と停止の細胞制御」	66名
	10月 国際ワークショップ 「意思決定の神経科学における未解明の問題」	37名
	11月 国際ワークショップ 「バイオロジーのマルチスケール現象」	35名
	11月 国際ワークショップ 「勾配と情報伝達:化学走性から発生まで」	62名
	12月 ウィンターコース 「生物複雑系の進化コース2008」	41名
2009年	5月 国際ワークショップ 「量子力学の基礎と応用」	41名
	9月 国際ワークショップ 「強化学習の脳神経メカニズムと注意欠陥多動性障害(ADHD)」	33名
	11月 国際ワークショップ 「DNAトポロジー」	37名
	11月 国際ワークショップ 「網膜:神経幹細胞と光受容体の変性」	57名
	11-12月 国際ワークショップ 「第4回分裂と停止の細胞制御」	72名
	12月 ウィンターコース 「生物複雑系の進化コース2009」	46名
2010年	2月 国際ワークショップ 「ガルーダ・ワン」	21名
	5-6月 国際ワークショップ 「定量的進化と比較ゲノム」	65名
	7月 国際ワークショップ 「発生神経生物学コース2010」	59名
	10月 国際ワークショップ 「日米科学技術協力事業「脳分野」:ニューロフィジオーム」	29名
	国際シンポジウム・ワークショップ 「沖縄における知的・産業クラスターの形成を目指して」	170名
	12月 国際ワークショップ 「計算生態学ワークショップ」	25名
ウィンターコース 「生物複雑系の進化コース2010」	50名	
2011年	2月 国際ワークショップ 「ガルーダ・フォー(保健サービスに関するソフトウェア基盤)」	25名



2003年4月に大学院大学の建設予定地として恩納村が選定された。丘陵地にある恩納キャンパスは亜熱帯の豊かな森に囲まれ、また大変美しい沖縄本島西海岸を見下ろすことができる。この理想的なロケーションは世界最高水準の研究を行うのにふさわしい環境であるばかりでなく、既存の研究施設や、将来の研究活動の発展から生じる新たな施設面の要請や施設拡張の要請にも対応できる。地域の豊かな自然環境に配慮した施設づくりは、キャンパス整備の最優先課題である。

基本コンセプト

世界最高水準の大学院大学にふさわしい、斬新かつ国際色あふれるキャンパスを実現するために、以下の3点をキャンパス整備の基本コンセプトとしている。

自然環境との調和と最先端テクノロジー

恩納キャンパスは自然の宝庫である。周辺の海は、世界でも有数の多様な生物が住む海域であり、キャンパス周辺にも様々な生物種が生息する森林地帯が広がっている。このような貴重な自然環境は最大限保全し、活かされなければならない。研究者が一日の大半を過ごすラボからの眺望を魅力的なものとする一方で、夏の強い日差しや台風の襲来を考慮した施設計画となっている。また、研究者にとって最も創造的な研究環境を実現するために最先端の情報技術インフラが整備されている。科学技術計算用のコンピューター施設は一般的な用途の他、研究にとって重要な新世代の設備として整備される予定である。

融合と交流

融合的な研究や教育を実践するため、各フロアの交流も図るなど、3次元のスムーズな移動を実現する施設となっている。このことで異なる分野の研究者や学生が共存し、日常的な接触が促進される。また、研究者同士、あるいは研究者と学生とのコミュニケーションが促進されるよう、共通スペースやサービス施設を含むビレッジゾーンを整備している。ショップ、育児施設、クリニック、スポーツ施設、などのサービス施設が含まれる。地元コミュニティとの文化交流や、共に開催するイベントなどを促進するキャンパスデザインとなっている。

連携とネットワーク

沖縄において高度な研究教育を展開するため、国内外の一流大学や研究機関などと連携していくことが重要であり、訪問研究者や交換留学生のための研究・滞在スペース、国際的なシンポジウムやワークショップを開催できるスペースを確保する。また、沖縄の自立的発展に寄与するために産学連携は必須であり、企業との共同研究など、盛んな産学連携活動が促進されるようにデザインするとともに、産業界と協働した研究成果の事業化など、将来の発展にも配慮する。

■ 新キャンパス施設整備について

施設整備計画概要

メインキャンパス

丘陵部のメインキャンパスでは、丘陵地の下側に生活関連施設を、上側に研究・実験施設が配置される。両施設は、湖上の歩行者用回廊、トンネル状のギャラリー、30mの高さのエレベーターで立体的に結ばれる。

研究者の日常の生活の場である生活関連施設には、住居、コンビニエンスストア、スポーツ施設、講堂などを設け、地域住民、観光客を含む来訪者との交流の場となるようにする。

研究・教育の主要な場となる研究・実験施設には、研究室、実験室、セミナー室などを含む複数の研究・実験棟が配置され、研究者間の活発な交流により、融合研究の舞台となることが期待される。研究実験棟は、クラスター状（部分的には集中、全体的には分散）に配置され、各クラスターを空中回廊で結ぶ。また、図書館、講義室、カフェテリア等が共用施設が研究・実験ゾーンの中央に配置されている。3つの研究棟合わせて教員50人規模の研究施設を収容できるものとする。

理想的な研究環境を構築するため、研究・実験施設の東側に教員用の低層住居を配置し、ラボやサービス施設などへのアクセスが容易なビレッジゾーンには、研究員のための居住環境を整備する。全体の5割にあたる研究者や学生用に、家族同伴者、研究者夫婦、あるいは独身者向けの住宅をキャンパス内に整備し、残りの5割は、社会生活や子供の教育などに配慮してキャンパスの外で住宅を確保する予定である。

シーサイドキャンパス

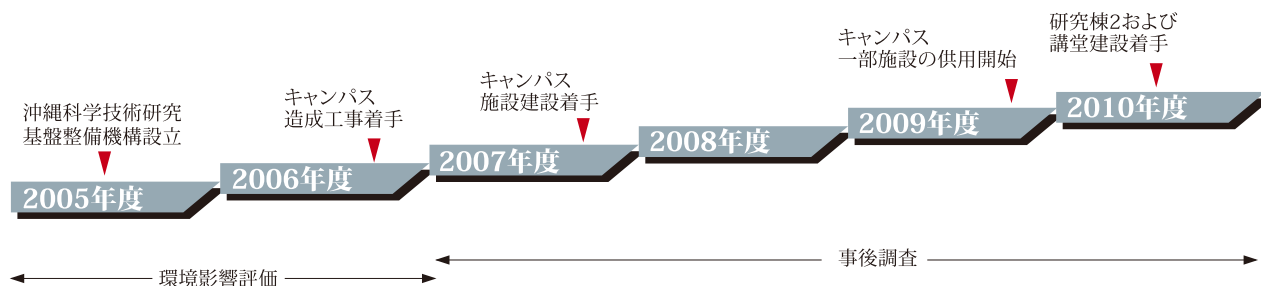
風光明媚な海岸地域に、セミナー施設、ファカルティース宿舎、厚生施設などが配置されている。シーサイドキャンパスに、2つの研究ユニットのラボがあり、ワークショップなどを開催するセミナーハウスとして使用している。

施設規模

教員50人規模で延床面積約7万㎡となる。将来的には教員300人程度で建物面積約25万㎡の規模となることも見込まれる。

施設整備スケジュール

環境に配慮したキャンパスとするために、近隣の住民、専門家、識者に広く意見を求める環境影響評価を自主的に行い、施設計画に反映した。メインキャンパスは、2007年3月に造成工事が始まり、2008年3月に着手した研究棟1・センター棟の建設が終了し、2009年度末に供用が始まった。研究棟2および講堂の建設は2010年秋に着工した。講堂は2011年秋に、研究棟2は2012年春に完成予定である。



事務局および研究実施場所について

恩納村キャンパス

2010年3月に使用が始まった研究棟1およびセンター棟は、延床面積約27,000㎡で、施設整備による周辺自然環境への影響を少なくするため、建物形状を地形になじませる等の設計上の工夫がなされている。施設には高度な排水処理施設が備わっており、水の再利用率は65%となっている。また、建物全体の90%で発光ダイオード(LED)照明を導入されており、従来型の照明に比べて二酸化炭素排出量を年間137トン削減することができる。

研究棟1には、電子顕微鏡、質量分析装置等を集約したバイオテクノロジー実験室や、共同研究エリア、教員のオフィス等が入っている。また、センター棟には、講義室、図書館、学務・事務オフィス等が入っている。研究棟の特徴は、実験機器やスペースを可能な限り共有化する「オープンラボ」であることで、分野を超えた研究者間の交流が生まれることで、学際的な研究が促進されることが期待される。

恩納村シーサイドハウス

2006年3月、恩納村の旧白雲荘がOISTシーサイドハウスと改名され、改修工事が完了後の同年4月に、その使用が始まった。多機能の同施設は研究室のほか、国際ワークショップやセミナーを開催する場所としても活用されている。

うるま市研究事務所



恩納村シーサイドハウス



沖縄科学技術研究・交流センター



沖縄健康バイオテクノロジー研究開発センター
沖縄工業技術センター アネックス

アクセス



OISTキャンパス

〒904-0495
沖縄県国頭郡恩納村字谷茶1919-1
Tel:098-966-8711 Fax:098-966-2887

OISTシーサイドハウス

〒904-0412 沖縄県国頭郡恩納村字恩納7542
Tel:098-966-8712 Fax:098-966-8715



うるま市研究事務所

〒904-2234 沖縄県うるま市州崎12-22
Tel:098-921-3835 Fax:098-921-3836



■ 地元との交流

子どもたちに科学に対する興味をもってもらい、地元住民に大学院大学に対する理解を深めてもらうことを目的に、運営委員や教員などによる講演やイベントを開催している。また地域の方々との親睦を深めることを目的に、地元で開催される行事にも参加している。

運営委員による講演 2010年7月10日

場 所 沖縄都ホテル、
沖縄県立那覇国際高校

講演者 ティム・ハント博士



教員による講演 2010年12月21日

場 所 OISTキャンパス
(恩納村立仲泊中学校児童対象)

講演者 ウルフ・スコグラント博士



教員による講演 2011年1月26日

場 所 恩納村立安富祖中学校
(同喜瀬武原中学校と合同開催)

講演者 アレクサンダー・ミケエ博士



教員による講演 2010年12月6日

場 所 恩納村立山田中学校
講演者 ゴードン・アーバスノット博士



教員による科学実験教室 2011年1月30日

場 所 南城市大里農村環境改善センター
講演者 ホルガー・イエンケコダマ博士



教員による講演 2010年12月8日

場 所 恩納村立恩納中学校
講演者 ベアン・クン博士



運営委員による講演 2011年2月8日

場 所 沖縄経営者協会経営懇談会(那覇市)
講演者 有馬朗人博士



ノーベル賞受賞者とのサイエンストーク 2011年2月11日

場 所/OISTキャンパス 講演者/トーステン・ヴィーゼル博士



OIST一般公開 2010年11月28日

場 所/OISTキャンパス 参加者/2,130名



地域行事に参加



前兼久ハーリーに参加 2010年6月15日



ソフトボール大会に参加 2011年3月6日





OKINAWA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY GRADUATE UNIVERSITY
沖縄科学技術大学院大学

<http://www.oist.jp>

2011.11.1.

